No. 1 (1978年1月)

<作品紹介>

1. グギ・ワ・ジオンゴ『一粒の麦』 宮本 正興

2. アイ・クェイ・アーマ『美しきものいまだ生まれず』 神野 明

No. 2 (1978年8月

<評論>

1. サンベーヌ・ウスマン『神の森の木々』について 鈴木 淳子

2. 現代アフリカにおける文学と政治 ゴードン・サイラス・ムアンギ

3. あとがきにかえて 黒人意識運動の中から生まれた詩 (A)

No. 3 (1980年1月)

<評論>

1. カン・テンバの『死ぬ意志』について一時代背景のなかでー 楠瀬 佳子

2. 危険な女流作家、グレイス・オゴト 深江 誠子

3. フランス人とアフリカ文学 砂野 幸稔

No. 4 (1984年4,5月)

<月例会報告>

1. ベッシー・ヘッドの世界 楠瀬 佳子

<書評と紹介>

2. 『ワングランの不思議』 アフリカ小説の定型を破る 宮本 正興

No. 5 (1984年7月)

<月例会報告>

1. ネグリチュード論の整理のために 砂野 幸稔

2. ベッシー・ヘッドの世界―その2 楠瀬 佳子

3. キマジの評価とは? 楠瀬 佳子

No. 6 (1985年10月)

1. 黒人舞台芸術のめざすものーナイロビ・ロンドン・南ア 楠瀬 佳子

No. 7,8 (1985年11月、12月)

1. アボメーのアップリケ "絵と文字のあいだ" 江口 一久

2. アフリカにどうアプローチするのか

一福井勝義氏の「書評」を考える一 宮本 正興

No. 9 (1986年1月)

1. 現代アフリカ人作家の作品に見るアフリカ人知識人の諸問題 砂野 幸稔 2. 韓国で上演された南アの風刺劇 砂野 幸稔 3. リチャード・リブの印象 楠瀬 佳子 No.10 (1986年2月) 1. 南アフリカの劇作家 ATHOL FUGARD 池内 靖子 No.11 (1986年3月) 1. アレックス・ラ・グーマを悼む 宮本 正興 2. アパルトヘイトと文学表現 宮本 正興 No. 12 (1986 年 4 月) 1. 部族超えた「サバンナの気」 和崎 洋一 2. A. ネトの試作におけるアフリカ性 一'mãe'の持つ意味— 高橋 譲 No. 13 (1986年5月) 1. アパルトヘイト下の文学 楠瀬 佳子 2. 作家は語る - ミリアム・チャーリ 楠瀬 佳子訳 No. 14 (1986 年 6 月) 1. ボーア戦争と映画・演劇 岡倉 登志 No. 15 (1986年7月) 1. アフリカ文学とわれわれ ― アフリカ文学研究会 10年に思う 宮本 正興 No. 16 (1986年8月) 1. ベッシー・ヘッドさん、さようなら 楠瀬 佳子 No. 17 (1986年12月) 1. L. S. サンゴール『我にコラとバラフォンの伴われんことを』を読む ―その1 砂野 幸稔 2. タンザニア恐怖の夜行バス 古沢 玲子 3. グギ・ワ・ジオンゴ著『アフリカ人はこう考える』を読んで 沢田 尚志 4. ノーベル文学賞受賞のウオレ・ショインカ 宮本 正興 No. 18 (1987年9月) 1. 黒人文化運動の最前線 ロンドンのなかのアフリカ 楠瀬 佳子

2

1. アフリカ人のアフリカ文学 ― セネガルでの見聞から 砂野 幸稔

No. 19 (1987 年 12 月)

2. <シンポジウム報告要旨> マルチニックの詩人エメ・セゼールについて				
一 二つの大陸の間で	前田	礼		
3. セネガルの女性作家、アミナタ・ソ・ファル				
— 『競技場の叫び声』における教育と伝統の問題	元木	淳子		
4. 南ア鉱山労働者の要求と「日本の問題」	神野	明		
5.『0度の女 死刑囚フィルダス』を読んで	深江	誠子		
6.「アフリカ文学を読む会」スタート	楠瀬	佳子		
No. 20 (1988 年 4 月)				
1. 南アフリカ — 私たちへの問いかけ	砂野	幸稔		
2. 特集『遠い夜明け』 一映画ファンのささやき	佐藤	大介		
3. 歴史を動かす力の成長 現実こそが挑戦である				
― 映画『遠い夜明け』上映によせて	神野	明		
4.『遠い夜明け』について	杉崎	晴之		
5. 素朴な意見広告 — 『遠い夜明け』を観て	宮本	正興		
6.『遠い夜明け』を観て	本多	薫		
7. 『遠い夜明け』雑感	楠瀬	佳子		
8.『遠い夜明け』を日本で観て	根本	利通		
9. <コンゴ日記> その1	額田	康子		
10. アフリカ文学を読む会				
望郷の詩 ― カマラ・ライエの『アフリカの子』	元木	淳子		
11.南アのエスキア・ムパシェーレ『草原の子マレディ』を読む	小出	香奈		
12. <連載> 語れ、アフリカの女たちよ	楠瀬	佳子		
No. 21 (1988 年 11 月)				
1. ジンバブエ紀行	楠瀬	佳子		
2. <コンゴ日記> その2	額田	康子		
3.ミリアム・マケバの自伝"MAKEBA MY STORY"を読んで	小出	香奈		
4. N・S・ンデベレの『愚者たち』を読む	額田			
5. ナディン・ゴーディマの『戦士の抱擁』から	元木	淳子		
6. この夢の型紙を切り取る アレクシス・デヴォー	山田	裕康訳		
No. 22 (1989 年 4/5 月)				
1. <南ア・女性特集号>女が集まる	山田			
2. <短編小説> 「今は静か」 チナ・ムショペ	楠瀬			
3. <新刊書紹介> ミリアム・チャーリ著『ソウェト物語』	佐竹	純子		
4. 怒れる作家ミリアム・チャーリ				
一 円熟するだが沈黙を強いる者たちと闘いつづける	楠瀬			
5.「アシナマリ」を観て	楠瀬			
6.『バサリの射手』	元木	淳子		

No. 23 欠番

No	24 (1990年5月)		
	評論 C.ホーヴェとチムレンガ・ソング	短良	富士男
	紹介 カリブの島の女の子	Ішщ	田工刀
۵.	一 ジャメイカ・キンケイドの短編紹介	風呂木	、 惇子
3	シャフィ・アダム・シャフィ『豪族フアドの屋敷』	竹村	
	グラディス・トーマスの短編「約束」を読む	楠瀬	
	書評 『マイケル・K』再考		こ のぞみ
-	『マイケル・K』と『ブラック・スワン』	北山	
	『二つの世界のはざまで』	元木	•
	『白く乾いた季節』	宮本	
	パン・アフリカ作家協会の結成	宮本	
10.	<翻訳>カリブ発 女たちの詩: 訳と解説	山田	
	<時評>グギ・ワ・ジオンゴの選択	宮本	正興
No.	25 (1990年10月)		
1.	『骨たち』にみる女たちのチムレンガ		
	— あるいはジンバブエのフェミニズム	楠瀬	佳子
2.	トマス・マプーモとチムレンガの伝統	福島	富士男
3.	『骨たち』の声	くぼた	のぞみ
4.	ジョナの精霊について	岡倉	登志
5.	祈りのうちに生きる南アフリカの若者たち	篠原	収
6.	A Small Place		
	― ジャメイカ・キンケイド ― 故郷への愛と怒り	風呂本	: 惇子
7.	<翻訳> カリブの声:訳と解説		
	— シャカ・シャカ / 1990 年	山田	裕康
8.	<時評> 翻訳について	宮本	正興
No.	26 (1991年4月)		
1.	<評論> スワヒリ語作家の諸問題	竹村	景子
2.	ザンジバルのターラブ	森田	淳子
3.	<リンガラで踊る>	渕上	純子
4.	J・M・クッツェーをめぐって	福島	富士男
5.	「アフリカ人作家シリーズ」を語る	楠瀬	佳子
6.	<翻訳> ザイールの HADITHI	伏原	納知子
7.	<時評> 野間宏さんのこと	宮本	正興

No. 27 (1994年10月)

<評論:文学と都市化>		
1. アフリカ小説と都市または都市化	宮本	正師
2. アフリカのフランス語文学とアフリカ社会	砂野	
3.80年代コンゴ文学に描かれた首都ブラザビルの諸相	元木	
4. 『アスミニの苦悩』(Tata za Asumini)に見る女性像	竹村	
<翻訳>	11/13	水 1
5. アフリカの国家地図を塗り変えよ		
- ウォーレ・ショインカに聞く	谷坂	さおり訳
<資料と情報>	п· <i>/</i> /	
6. グギ・ワ・ジオンゴ国際会議開かれる	宮本	下衄
<時評>	宮本	
	шин	ш./\
No. 28 (1995 年 10 月)		
<評論>		
1. セネガル点描 その1	砂野	幸稔
2. セロウェ村再訪 ― ベッシー・ヘッドを訪ねて	楠瀬	佳子
<書評>		
3. ゴーディマの2冊の本を読む	宮本	正興
4. モンゴ・ペティ『ボンバの哀れなキリスト』	宮本	正興
5. 不思議なラブストーリー		
一 ベッシー・ヘッドの小説『マル』	元木	淳子
6. サンベーヌ・ウスマン『ニーワン、セネガルのこころ』	杉原	幸子
<時評>		
7.ショインカのナイジェリア脱出	宮本	正興
8. 伊藤正孝さんの思い出	宮本	正興
9.「女性の日」が国民の休日 — 南アフリカでの女たちの闘い	楠瀬	佳子
No. 29 (1997 年 12 月)		
<評論>		
1. ロベン島を訪ねて	楠瀬	佳子
2. 新しい時代を迎えて ― スティーブ・ビコは甦る	楠瀬	佳子
3. 罪作りな現代の民話(セネガル点描番外編)	砂野	幸稔
4. カリクスト・ベヤラ『アフリカの娘アセーゼ』のゆくえ	元木	淳子
<書評>		
5. アフリカ的「知」の現代性		
― エマニュエル・ドンガラ『世界が生まれた朝に』における歴史と哲学	西村	涼子
<時評>		
6. アフリカン言語の将来性	宮本	正興

No. 30 (2002年12月)

<評論>

1. 南アフリカ紀行 - サラ・バートマンとの出会い 楠瀬 佳子

2. アフリカ児童文学の現在

一 ヴェロニク・タジョの視野を交えながら 村田 はるせ

3. サイド・アフメド・モハメド作『砂まじりのキトゥンブア』

(Kitumbua Kimeinga Mchanga) を読む 竹村 景子

4. だれが歴史を語るのか

一 アマドゥ・クルマ『モネ、侮辱と挑戦』を読む 元木 淳子

5. ガカアラ・ワ・ワンジャウ氏のことなど

宮本 正興

6. ナショナリズムとしてのアフリカ文学の時代

ガカアラ、ベディ、サンゴール追悼

砂野 幸稔

7. パリで出会ったアフリカ人留学生

中山 千冬

<書評>

8. 宮本正興『文化の解放と対話―アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ』

砂野 幸稔

<コラム>

9. ルワンダ - 記憶の義務として書く

砂野 幸稔

No. 31 (2003 年 6 月)

<評論>

1. くそいまいましい太陽がこの空にまた

一 アマドゥ・クルマ『アラーの神にもいわれはない』 真島 一郎

2. サイド・アフメド・モハメド短編集

『信じたくば信じるがよい』(Sadiki Ukipenda) に込められた思い 竹村 景子

3. コートジボワールの都市に生きる

一 ヴェロニック・タジョの『戦いの場 愛の場』から 村田 はるせ

4. 一冊の絵本が「日本とタンザニアの距離を縮める」

下垣 桂二

<紹介・翻訳>

5. シンディウエ・マゴナ『母から母へ』(峯陽一、コザ・アリーン訳) 宮本 正興

<アフリカ文学通信>

6. グギ・ワ・ジオンゴ「創作・翻訳国際センター」所長に/

第29回アフリカ文学会アレキサンドリア図書館にて/

イラク戦争に関する決議文 楠瀬 佳子

<コラム>

7. アマドゥ・クルマに受難 楠瀬 佳子

No. 32 (2004年2月)

<評論>

1. 二つの「アフリカルネサンス」論 宮本 正興

2. アダム・シャフィ・アダムの『闘い』を読む 荒瀬 早幸

3. サイド・アフメド・モハメドとの6年ぶりの再会の余韻 - 「アフリカ諸言語によるアフリカ文学」教育という挑戦 竹村 景子 4. アフリカ言語調査雑感 一語彙集に書けないこと、あるいは語彙集を作りつつ思うこと 梶 茂樹 <アフリカ文学時事評論> 5. J・M・クッツェーのノーベル文学賞受賞と「アフリカ文学」 - 『恥辱』と『動物のいのち』から 楠瀬 佳子 6. 共感する力と絶望を覆す過激な言葉 砂野 幸稔 一 アマドゥ・クルマ追悼 <翻訳> 7. 『あふれ出る思い』 一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(2) 砂野 幸稔 No. 33. (2004年8月) <特集:アフリカ地域研究としてのアフリカ文学研究> 1. 問題提起 - ナショナルな語りとしてのアフリカ文学 砂野 幸稔 2. スワヒリ文学教育の現状と課題 一 スワヒリ語教師としての経験から 竹村 景子 3. アフリカの都市に生きる不安 一 コートディヴォワールの作家ヴェロニック・タジョの作品 『戦いの場 愛の場』から 村田 はるせ 4. アマドゥ・クルマ (68年) ― 反システム運動としての西アフリカ文学 真島 一郎 5. 南アフリカの状況と『母から母へ』 峰 陽一 6. 文学を通してみる南アフリカ社会 - 全体のまとめに代えて - 楠瀬 佳子 <書評> 7. 松田素二『呪医の末裔―東アフリカ・オデニョー族の20世紀』宮本 正興 <翻訳> 8. 『あふれ出る思い』 一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(3) 砂野 幸稔 No. 34 (2005 年 3 月) <評論> 1. アフリカ SF & 推理小説の愉しみ 鈴木 裕之 2. ウォライタの謎々 若狭 基道 3. タンザニア女性の声 - 女性性器切除をめぐって 竹村 景子

_

楠瀬 佳子

一アマドゥ・クルマの『拒む時には否と言う』を読む 元木 淳子

4. 内戦を語る声

<アフリカ文学時事評論>

5. 最近の南アフリカ文学動向

<翻訳>

6. 『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(4) 砂野 幸稔

No. 35 (2005 年 8 月)

<評論>

1. D,T.ニアンヌ、アンバテ・バーそしてエルドリッジ・ムハマドウ

一アフリカロ伝承史研究の三巨頭

嶋田 義仁

2. タンザニアの民族語 ボンデイ語のことわざ

高村 美也子

3. 不思議の世界の記憶

一クルマの『アフリカの狩人ヤクバ』を読む

元木 淳子

4. 『砂まじりのキトゥンブア』を読んで

一あるスワヒリ文学授業の1年間

竹村 景子

5. セネガルにおけるアラビア語文学

ーイスラームと文学の言語

砂野 幸稔

<アフリカ文学短信>

6. ジンバブエの作家イヴォンヌ・ヴェラの死を惜しむ

楠瀬 佳子

7. スワヒリ語による絵本翻訳作業

竹村 景子

<翻訳>

6. 『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(5)

砂野 幸稔

No. 36 (2006年5月)

<評論>

1. ケレウェの「女性語」

小森 淳子

2. セネガルのムリッド教団とアフマド・バンバ

刈谷 康太

3. アフリカ的であること

―センベーヌ・ウスマンの『モーラーデ』の場合

元木 淳子

4. 混血児を描く小説のメッセージ

―モニク・イルブドの『肌の苦悩』を読む

村田 はるせ

5. 西欧近代の「時間」と「アフリカ文学」の時間

砂野 幸稔

6. 兄からの愛あふれる手紙

『シャアバン・ロバートの手紙』を読む(その1)

竹村 景子

<アフリカ文学短信>

7. エレン・クズワヨを悼む

楠瀬 佳子

8. ジョン・ラ・ルースを悼む

楠瀬 佳子

<翻訳>

9. 『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(6)

砂野 幸稔

No. 37 (2007年5月)

<評論>

1. 私たちはアフリカ人、とアルジェリア人が言うとき

一カテブ・ヤシンを例として

鵜戸 聡

2. クッツェーの微笑み

・・あるいはテキストの落とし穴

くぼた のぞみ

3. クローバリズムのなかで再び「人種」の問題を考える

―ゾイ・ウィカム『光のなかで戯れる』を読む

楠瀬 佳子

4. ヴェロニカ・タジョの

『イマナの影―ルワンダの果てへの旅』に学ぶ

元木 淳子

<アフリカ短信>

5. トーロ語の鳥名二例

梶 茂樹

6. 最近の文学動向

楠瀬 佳子

7. 八年ぶりのタンザニア訪問

竹村 景子

<翻訳>

8. 『あふれ出る思い』

ー識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(7) 砂野 幸稔

9. 兄からの愛あふれる手紙

- 『シャアバン・ロバートの手紙』を読む(その2) 竹村 景子

No. 38 (2008年10月)

<評論>

1. タンザニアの民族語大河小説『ミョンベケレとブゴノカ』

小森 淳子

2. 南アフリカの文化と人びとに触れながら過ごす

一いくつかの日記から

楠瀬 佳子

3. センベーヌ、セゼール追悼

一「人間主義(ヒューマニズム)」としてのアフリカ文学の時代 砂野 幸稔

4. アラン・マバンクの「分身」

- 『ヤマアラシの回想』を読む

元木 淳子

<書評>

5.「言語問題」から、地域研究の新地平を拓く

一砂野幸稔氏の新書『ポストコロニアル国家と言語』 宮本 正興

<翻訳>

6.『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(8)

砂野 幸稔

7. 兄からの愛あふれる手紙

- 『シャアバン・ロバートの手紙』を読む(その3)

竹村 景子

No. 39 (2009年9月)

<評論>

1.	Corneille の歌を「読む」	溝口	昭子
2.	草の根の母が表す自分史/家族史		
	一ウガンダの「メモリーブック」	大地	真知子
3.	グギ・ワ・ミリエの思い出	宮本	正興
4.	オリーブ・シュライナーとの出会いの旅	楠瀬	佳子
5.	言語を「選択する」ということ		
	一アフリカにおける母語教育と言語権について考える	米田	信子
6.	ラマダン中に村で食すーチャアニ村のフタリとダクー	竹村	景子
<翻]訳>		
7.	『あふれ出る思い』		
	一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集 (9)	砂野	幸稔
No.	40 (2010年6月)		
<割	空論 >		
1.	ケニア共和国スワヒリ語学会に参加して		
	―「標準スワヒリ語とは何か」を考えた3日間	竹村	景子
2.	ことばの向こうに見えるもの		
	-「読書クラブ」の子供たち-PRAESA の活動から	楠瀬	佳子
3.	エスキア・ムパシェーレのこと	宮本	正興
4.	Fatma Binti Baraka というおばあちゃん		
	ーBi. Kidude という歌姫	宮崎	久美子
5.	『チョコラ!』を観る、『チョコラ!』を読む	竹村	景子
6.	現地語の習得には慎重に		
	ーコンゴ民主共和国での軍事語・スワヒリ語	米川	正子
<書	評>		
7.	『ニューエクスプレス スワヒリ語』	宮崎	久美子
8.	『スワヒリ文学の風土―東アフリカ海岸地方の言語文化誌』		
	と私的回想	根本	利通
<翻]訳>		
9.	『あふれ出る思い』		
	一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(10)	砂野	幸稔
No.	41 (2011年5月)		
1.	アンコーレ王国における社会階級と音楽の関連性に関する一考察	横塚	千登勢
2.	華やかな「だます」物語に魅せられて		
	―ウガンダ・カンパラの人気劇団「エイボニーズ」	大門	碧
3.	『プレザンス・アフリケーヌ』の記録映画		
	一彫像の「死」が問うもの	中村	隆之
3.	私の出会った作家たち(1)		
	ーブルータス/エクウェンシ/セパムラ	宮本	正興

<翻訳>

4.『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(11) 砂野 幸稔

<コラム>

5. 第37回アフリカ文学会に参加して 楠瀬 佳子

<書評>

6. チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ著『半分のぼった黄色い太陽』 楠瀬 佳子

7. 編集後記として - 世代交代 楠瀬 佳子

No. 42 (2015年4月)

1. 主人公カジモトの女性関係から読み解く

一E・ケジラハビの『うぬぼれ屋』 小野田 風子

2. 歌い継がれる女の処世術

一儀礼の詩に見るマサイ女性のジェンダー観 林 愛美

3. 送り出し社会から見た移民

一ファトゥ・ディオムの『大西洋の海草のように』を読む 村田 はるせ

4. 覚書き:プシカリの不可思議 小川 了

5. 私の出会った作家たち②

ーアンドレ・ブリンク (André Brink, 1935.5.29-2015.2.6) 宮本 正興<

<翻訳>

6. 『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(12) 砂野 幸稔

<書評>

8. 宮本正興著『評伝グギ・ワ・ジオンゴ=修羅の作家、

現代アフリカ文学の道標』(第三書館) 砂野 幸稔

9. J.M.クッツェー著『サマータイム、青年時代、少年時代』

(くぼたのぞみ訳 インスクリプト、2014) 楠瀬 佳子

No. 43 (2016年4月)

1. ブルキナファソの作家アンソムウィン・イニャス・イエンの

絵本『平和のハト』のメッセージ

村田 はるせ

2. スワヒリ詩の変容と展開一定型詩、ターラブ、自由詩 小野田 風子

3. 日本のアジア主義者のアフリカ認識

一日本エチオピア交流とアメリカ黒人問題の事例から 今泉 奏

4. マサイの神話を通してみる口承文芸のポスト・コロニアル 林 愛美

5. <話題提供> 「20世紀アフリカ文学の遺産」

宮本 正興

6. 私の出会った作家たち(3)

チェンジェライ・ホーベ (Chenjerai Hove, 1956-2015) 宮本 正興

<翻訳>

7. 『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(13) 砂野 幸稔

No. 44 (2018年1月)

1. ヨルバのポピュラー音楽に見る文化の変容と伝統の再構築 塩田 勝彦

2. 西アフリカのフラン語公用語圏での児童書出版

―セネガル・ダカールでのインタヴューと観察 村田 はるせ

3. <翻訳>『あふれ出る思い』

一識字から生まれたセネガル農村女性たちの詩集(14) 砂野 幸稔

4. The House That Doris Built

—Gendered Space and Female Mentality in Lessing's African Stories Li Chao (李超)

5. 社会主義時代のタンザニアにおける検問

-E.ケジラハビの詩「鼠ども」の分析をもとに 小野田 風子

6.「リヨンゴ王の叙事詩」訳稿 宮本 正興

7. ザンジバルとの 30 年 ― チャアニ村滞在雑記 竹村 景子

8. <書評>Mark Sanders, Learning Zulu:

A Secret History of Language in South Africa 上林 朋広

9. <アフリカ文学動向> 楠瀬 佳子

10. アフリカ表象探検記

ースワヒリ語を探してディズニーテーマパークへ 川村 明日香

No. 45 (2020 年 4 月)

1. マサイのローカル NGO による代替儀礼の分析

一「教義」の内容に着目して 林 愛美

2. スワヒリ語詩の社会指向性

―19世紀初頭のモンバサの詩人ムヤカ・ビン・ハジに着目して 小野田 風子

3. 屋根の上の人形とフクロウーラム島の民俗

ーウンム・クルスムさんに聞く 宮本 正興

4. フロール・ハズメの児童文学 村田 はるせ

5. South African Women's Texts after and before 2010 Keiko Kusunose